

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02978

研究課題名（和文）Creating a research-driven collaborative framework for global citizenship and international service-learning studies

研究課題名（英文）Creating a research-driven collaborative framework for global citizenship and international service-learning studies

研究代表者

O・Connell Sean (OCONNELL, Sean)

南山大学・総合政策学部・教授

研究者番号：40580824

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、国内大学と海外大学との連携を通じて、インターナショナル・サービス・ラーニング（ISL）学（グローバル・シチズンシップ、異文化理解）の大きな発展を目指すもので次のようなことを目的に実施した。（1）ISL学に関する国際共同研究のインフラを構築し、日本国内における海外の最新動向や研究・技能の普及に貢献すること、（2）日本と海外の連携によるサービス・ラーニング・プログラムの枠組みを設計すること、そして（3）国内外の研究者の協力と助言を得て、コミュニティ参加、グローバル・シチズンシップ、異文化認識の分野における日本国内の知識向上に貢献することに成功した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本国内外の大学が体験型教育をカリキュラムに取り入れる傾向が強まる中、本研究の意義は、主に3つのことに分けることができる。第一に、サービス・ラーニングに関する国内外の大学の共通のカリキュラム設計目標を明らかにしたことである。第二に、サービス・ラーニングの体験型教育モデルに関する世界的な潮流を明らかにしたことである。最後に、今後の研究協力の枠組みについて、日本と海外の大学間で情報交換や意見交換を行うことができた。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to develop international service-learning (ISL) studies (global citizenship and cross-cultural understanding) through collaboration between universities in Japan and abroad. The three main areas of achievement were: (1) creating an infrastructure for international joint research on ISL studies and to contribute to the dissemination of the latest trends, research, and skills in Japan; (2) designing a framework for service-learning programs in collaboration between Japan and other countries; and (3) developing a framework for community service-learning programs with the cooperation and advice of researchers in Japan and abroad. participation, global citizenship, and cross-cultural awareness.

研究分野：Service Learning

キーワード：Service Learning Global Citizenship Community Engagement Intercultural Awareness Curriculum Design

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

過去 10 年間、国際サービス・ラーニング（以下、ISL）は、学生自身の異文化意識とグローバル・シチズンシップの感覚を高めることを目的として、大学生の間でますます人気が高まっている。Bringle and Clayton (2012, p.105)が説明するように、サービス・ラーニングは、「学問的、市民的、個人的な学習目的を達成し、公共的な目的を推進するために、学生、教職員、地域社会の人々が参加する相互的な連携の中で、学問的な教材や奉仕活動、批判的な考察」を統合することを目指すものである。言い換えれば、教育機関、地域住民、団体がパートナーシップを結び、学生が地域社会との関わりを通して学ぶ機会を提供する体験型教育の一形態と言える。このように、ISL プログラムでは、学生（短期・長期）が外国のホスト・コミュニティや教育機関との交流を通じて、知識や実践を身につけることができる。それを踏まえて、本研究は日本国内外のグローバル・シチズンシップと国際サービス・ラーニング研究を中心にした研究主導型の共同フレームワーク構築の可能性を検証することを目的とした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国内大学と海外大学との連携を通じて、ISL 学（グローバル・シチズンシップ、異文化理解）の大きな発展を目指すものであった。主に次の 2 点に焦点を当てた。

1. ISL に関する国際共同研究のインフラを構築し、日本国内における海外の最新動向や研究・技能の普及に貢献すること
2. 日本と海外の連携によるサービス・ラーニング・プログラムの枠組みを設計すること

それに加わって、国内外の研究者の協力と助言を得て、コミュニティ参加、グローバル・シチズンシップ、異文化認識の分野における日本国内の知識向上に貢献することも目指した。

3. 研究の方法

研究方法は下記の 3 段階に分けて実施した。

- 第一段階（Stage 1）
 1. グローバル・シチズンシップ、体験教育、サービス・ラーニングのカリキュラムデザイン、教育学の傾向に関する最新の文献のレビュー
 2. 日本国内外において構築されたサービス・ラーニング・プログラムに関する研究の枠組みとカリキュラム・デザインに関する調査及びデータ収集及び分析
 3. データの解析
 4. Service Learning Online Resource Homepage のデザイン

- 第一段階 (Stage 2)
 1. 最新の文献のレビューの継続
 2. 日本国内外に調査データ収集及び分析
 3. データの解析の継続
 4. Service Learning Online Resource Homepage (以下、SLORH)のデザインの継続
 5. 最終年度のシンポジウム (テーマ : ISL 教育及び研究の今後) の計画・準備等

- 第一段階 (Stage 3)
 1. 最新の文献のレビューの継続
 2. 日本国内外に調査データ収集及び分析
 3. データの解析の継続
 4. SLORH の作成・パイロット試行
 5. 「 ISL 教育及び研究の今後 」 シンポジウム実施
 6. 海外サービス・ラーニング・プログラムの枠組み設計と実施計画

4 . 研究成果

本研究が始まった直後 (2020 年度) に Covid-19 のパンデミックが発生した。それにより、計画していた調査をオンライン (日本国内にある福島大学や仙台大学を含む) に切り替えたりするような工夫をする他、2020 年度中に研究休暇先のニュージーランドにて、ロックダウン終了後に、ニュージーランド国内数回の現地調査ができた。カンタベリー大学で実施されているサービス・ラーニングのカリキュラムを視察できただけでなく、研究休暇期間中にニュージーランド国内の他の大学や専門学校を含む高等教育機関 (オークランド大学、オタゴ大学、ビクトリア大学ウェリントン校等) やコミュニティ協力団体を現地調査し、サービスラーニングプログラムに携わっている担当教員、団体メンバーや学生にインタビューを行い、貴重なデータ収集を行うことができた。

全体的に第 1 段階は順調に進み、ニュージーランドのカンタベリー大学にて当大学「 UC Community Engagement Hub Director, University of Canterbury, New Zealand 」であるビリー・オステイーン博士と直接に ISL に関連する共同研究を行った。このような研究活動を通じて、ISL の学習効果や体験型のメリットについて、プログラム実施する教育機関の見解だけでなく、学生にとってどのような学習効果などを感じているかについても多くのデータを集めることができた。

第 2 段階において、2021 年度前半の Covid-19 の制限により当初の計画通りには進まなかったため、研究期間を 1 年間延長することとした。直接に現地調査ができなかったが、その代わりに、海外大学や団体との定期的なオンライン・ディスカッション・セッションや研究フォーカス・グループ・セッションを含むオンラインミーティングを通じて、データを収集し続けることができた。また、グローバル・シチズンシップ研究とサービス・ラーニングの研究分野における最新の動向を把握するため、最新の文献のレビューも続けた。Covid-19 制限緩和後、日本国内については、数箇所 (福島大学、仙台大学、国際基督教大学) への現地調査を行い、国内運営プログラムの現地視察が可能となった。

2022 年度には、Covid-19 制限がさらに緩和され、日本国内外の大学（日本：国際基督教大学、上智大学、愛媛大学、香川大学）（海外：カナダのマギル大学、コンコルディア大学、ニュージーランドのカンタベリー大学）への現地視察・調査を実施した。よって、研究データの収集、分析、研究発表と執筆活動は順調に進んだ。

最終年度中（2023 年度）に第3段階を無事に進めることができた。最終データ調査、執筆や研究発表を続けると同時に、SLORH のリソースとして使用する論文、研究活動の紹介や ISL プログラム担当の教員及び履修学生のインタビュー動画の編集作業に入った。ホームページの配信開始を 2024 年度の夏頃を予定している。

当初、南山大学で実施する予定であった「ISL教育及び研究の今後」シンポジウム実施については、海外から研究者招聘がスケジュール的に調整することが難しくなったため、代わりに、ニュージーランドのカンタベリー大学が2024年3月に開催した「Service-Learning and Community Engagement Collaboration: What Does the Future Hold for Service-Learning Curriculum Design and Implementation?」フォーラムにて、本研究の成果を発表する他、参加者との意見を交換し、国際ISLに関する共同研究の可能性について話し合うことができた。このような活動を通じて、大きな研究成果として目標にしたISLプログラムの枠組み設計と実施計画が、以下のように2024年8月に南山大学にて実現できるようになった。今後は、今までにできた他の日本国内の大学との連携を通じて、今後共同海外研修プログラムとして発展できるように話し合っていく予定である。

Nanzan University International Service-Learning Program August 2024

Day	Activity	Day	Activity
1	Depart Japan for New Zealand	8	<ul style="list-style-type: none"> ● Morning: Community engagement lecture on campus ● Afternoon: SVA activity
2	<ul style="list-style-type: none"> ● Arrive in Christchurch. ● UC Campus tour and program orientation 	9	<ul style="list-style-type: none"> ● Service-learning #3: Sumner Beach and Residential Project
3	<ul style="list-style-type: none"> ● Morning: Global citizenship lecture on campus ● Afternoon: city inspection of red zones and Quake City 	10	<ul style="list-style-type: none"> ● Service-learning #4: Community clean-up Project
4	<ul style="list-style-type: none"> ● Service-learning #1: Riccarton Service Project 	11	<ul style="list-style-type: none"> ● Project reflection and data analysis
5	<ul style="list-style-type: none"> ● Morning: Project reflection ● Afternoon: Student Volunteer Army member (SVA) meeting 	12	<ul style="list-style-type: none"> ● Presentation preparation on campus
6	<ul style="list-style-type: none"> ● Service-learning #2: CBD Service Project 	13	<ul style="list-style-type: none"> ● Student presentations to UC members
7	<ul style="list-style-type: none"> ● Project reflection and data analysis 	14	Return to Japan

まとめ

本研究を通じて明らかになった点が多くある。まず、世界規模で見れば、多くの高等教育機関が、学生の市民的責任と社会参加の重要性を教える方法として、体験型教育モデルを取り入れていることが明確である。日本国内外の多くの教育機関は、共感を育み、積極的な市民活動を奨励し、社会のさまざまな層が直面する課題に対する理解を深める機会を学生に与えるため、実体験に重点を置いている。サービス・ラーニング教育の核心は、学問的な知識と深い社会的責任感を兼ね備えた、豊かな人間を育成することである。サービス・ラーニングに参加する学生は、高齢者介護、災害救援、環境保全、地域開発など幅広い分野で、地域社会や地方自治体、市役所などとの協働活動を通じて、さまざまな社会奉仕プロジェクトに参加することができる効果的な教育モデルであることに違いない。

日本国内外の大学が体験型教育をカリキュラムに取り入れる傾向が強まる中、学生が従来の教室での学習を超えた有意義で実践的な体験を得られるようにすることは不可欠であることが、本研究を通して理解できた。そういった意味で、今後ISL教育が引き続き有望であることを示しているが、今後の課題のひとつは、国際協力のさらなる発展を生み出すために、いかにしてよりグローバルな対話を実現できるかということである。そのためには、国際社会とのパートナーシップの調整におけるロジスティクスの問題、学生の成績の評価方法の統一、すべての利害関係者にとって相互に有益な成果の確保といった要素が、今後の議論の重要な部分を占めることになるであろう。しかし、サービス・ラーニング教育に対する共通のビジョンを認識し、適切な支援があれば、これらの課題に対処することは可能であるからこそ、今後連携できるISLプログラムの開発と共同研究の基盤を強化していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 O'CONNELL, Sean	4. 巻 27
2. 論文標題 Analyzing Service-Learning Curricula Worldwide: Service-Learning in a Global Context	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of the Nanzan Academic Society Humanities and Natural Sciences	6. 最初と最後の頁 91-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 O'CONNELL, Sean	4. 巻 26
2. 論文標題 An Investigation of Current Design, Implementation and Evaluation Methods of Service-Learning Programs in Japan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of the Nanzan Academic Society Humanities and Natural Sciences	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 O'CONNELL, Sean	4. 巻 24
2. 論文標題 Service-Learning in Japan: A Comparative Analysis of Domestic and International Programs at Tertiary Institutions	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of the Nanzan Academic Society Humanities and Natural Sciences	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 O'CONNELL, Sean & O'STEEN, Billy	4. 巻 21
2. 論文標題 Creating a Framework for Global Citizenship and International Service-Learning Studies: An Experiential Education Approach	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Nanzan Academia Humanities and Natural Sciences Journal	6. 最初と最後の頁 139-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 O'CONNELL, Sean & O'STEEN, Billy	4. 巻 22
2. 論文標題 Exploring the Effects of Service Learning: Student Voices from CHCH101	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nanzan Academia Humanities and Natural Sciences Journal	6. 最初と最後の頁 147-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 O'CONNELL, Sean
2. 発表標題 Exploring the world of international service-learning: Japanese student views on global citizenship and community engagement
3. 学会等名 University of Canterbury Faculty Workshop Series: College of Education, Health and Human Development, University of Canterbury, New Zealand (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 O'CONNELL, Sean
2. 発表標題 The future of international service-learning collaborative research and program design
3. 学会等名 University of Canterbury UC Community Engagement Hub Research Forum 2024 (招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 O'CONNELL, Sean
2. 発表標題 Analyzing Service-Learning Curricula Worldwide: Service-Learning in a Global Context
3. 学会等名 The IAFOR International Conference on Education Hawaii (IICE) (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 O'CONNELL, Sean	4. 発行年 2022年
2. 出版社 創成社	5. 総ページ数 12
3. 書名 「コロナの影響と政策－社会・経済・環境の観点から－」内 第十章：「コロナ禍におけるリスクコミュニケーションの成功例」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------